



「吉田祭礼絵巻（利根翠塙模写本）個人蔵」を加工・転載 題字：中澤京苑

去る11月3日、コロナ禍の影響で中止が続いていた吉田秋祭が、3年ぶりに開催されました。吉田秋祭は「おねり行列」をはじめとする祭りのあり方が江戸時代からほとんど変わらず残っていることから、県の無形民俗文化財にも指定されています。爽やかな秋晴れに恵まれた当日も、藩政時代と見まがう趣に、多くの見物客が魅了されました。350年以上受け継がれてきた伝統と想いを、記録とともに紡ぎます。



特集 四百年後の君たちへ

3年ぶりの開催

吉田秋祭





今年も変わらない 今年だけの秋祭り

11月3日の早朝、祭りは「卯之刻相撲」の奉納から始まります。行司役の「相撲のはなじゃあ」を合図に引き分けとなり、勝負は翌年に持ち越されます。その後夜が明けてきた頃、鹿の子が軽やかに境内へ駆け上がり、踊りを奉納します。

その頃、各地区ではそれぞれの準備が始まります。手際よく進む練車の組み立てを見学する人もちらほら、「おねり行列」に向けてムードが高まります。それぞれの地区から集合場所へ集まり、にぎわいの中、出発まで思い思いの時間を過ごします。今年も変わらない、今年だけの秋祭りが、地域全体で創られていきます。

いよいよ行列の出発時間になると、侍姿の御用練先頭に、御船、猿田彦・御神餅、練車、鹿の子、牛鬼、神輿と続き、番外として四ツ太鼓と宵宮宝多が連なり、時代絵巻がよみがえります。





秋の祭りは鹿をどり

鹿の子は、野口雨情の歌で「吉田千軒八幡さまの秋の祭りは鹿をどり」とあるように、祭りの花形の1つです。「廻れ廻れ水車」の哀調を帯びた旋律とともに、地域を巡り踊りを奉納します。1日で踊る数は約70回だそうで、大人が子鹿役の子どもたちを励ましながら見守る様子が、とても印象的でした。



吉田の暴れ牛鬼

牛鬼は、元町・鶴間・浅川地区の持ち回りで、今年は元町が担当です。以前は「吉田の暴れ牛鬼」として名が通っていたそうで、ゆつたりと進むおねり行列の中で、その迫力ある練りはひととき大きな存在感を見せます。胴体は毎年新しく作られています。作業は和やかな雰囲気ながらも丁寧に進められ、伝統だけでなく技術もしっかりと受け継いでいます。





紡がれる想い

吉田の鹿踊りは雄鹿2頭、雌鹿1頭、若鹿2頭、小鹿2頭の七ツ鹿で、立間鹿の子保存会が継承しています。小鹿の踊り手は立間小学校4年生の2人、他の5人は地区の若者が担い、祭りが近づくとはぼ毎日夜遅くまで練習に励みます。会長の赤松 宗治さんを含め指導者も元踊り手、指導にも熱が入ります。しかし、少子化で後継者を探るのが難しくなってきたというそうです。

そんな中、吉田愛児園とたちばな保育園では、祭りの前後の日に「おまつりごっこ」と称して、牛鬼や神輿の練り、鹿踊りなどを行っています。本番さながらに練りや踊りを披露する子どもたちの中には、将来担ぎ手や踊り手として祭りに参加する子もいるでしょう。見守る保護者の中には、今年の踊り手の姿も見られました。

地域の先達から後継へ、親から子へ、次の世代へと想いは紡がれています。



四百年後の君たちへ

この数年、吉田秋祭に限らず
伝統行事の多くが、中止や延期を
余儀なくされてきました。

しかし今、形は変われど少しずつ
開催できるようになってきています。

こうした流れの中で、伝統行事は、
地域や人とのつながりを生み、
歴史と文化、そして想いを継ぐ、
重要な機会であることを改めて感じます。

こんな時代だからこそ、絶やすことなく
続けていく必要があるのだと思います。

宇和島藩ができて四百余年、
時間をかけて宇和島に根付いてきた歴史や文化
そして、そこに関わる人たちの営み―

それこそが、このまちの魅力として
宇和島に息づく「日常の豊かさ」なのです。

これからもこのまちが

「ココロまじわうトコロ」としてあり続けられるよう

次の四百年へ、この想いを託します。

